



大学の学び

# 実践的な問題解決能力を身につけ、 各地域での平和構築への道筋を考える

東京外国語大学 国際社会学部 国際関係コース  
篠田英朗研究室

専攻言語の運用能力を身につけながら、その地域の状況も学ぶ

東京外国語大学国際社会学部は、グローバルな視点で問題を考え、その解決ができる実践的な能力を備える人材を育成している。

1・2年次は、全学部共通の教養科目を履修しながら、14の地域、27の言語から入学時に選択した地域と

私たちが紹介します



国際社会学部  
国際関係コース4年  
洲鎌 慎吾  
すがま・しんご  
東京都立小松川高校卒業。



国際社会学部  
国際関係コース4年  
山崎 有紗  
やまざき・ありさ  
千葉県立東葛飾高校卒業。

言語にかかわる基礎的な内容を学ぶ。同大学国際社会学部国際関係コース4年の山崎有紗さんは、中央アジア地域、ロシア語を選択した。

「将来の夢は、国連で働き、途上国の教育支援に携わることです。そこで、英語以外にもう1つ国連公用語を習得したいと考えました」

選択した言語の高度な運用能力を身につけるため、1・2年次は、週5日、文法や読解などの語学の授業を履修する。同学部4年の洲鎌慎吾さんは、ラテンアメリカ地域、スペイン語を選択した。

「2年次は、読解の課題文のテーマが、ラテンアメリカの経済や古典文学、難民問題などになり、専攻地域についての知識が身につきました。また、概論科目で理論を学ぶ際にも、専攻地域を具体例として考える

ことで、理論が理解しやすくなりました」(洲鎌さん)

## 国際機関で用いられる 問題解決の手法を学ぶ

2年次後期からは、同学科の3コース(\*1)の専門科目を履修する。

『ふつうの人々とナチ体制・ホロコースト』という授業で、当時の手紙や日記などを分析し、『ふつうの人々』がどのようにナチス体制に関与していたかを学んだことで、人の攻撃性に関心を持つようになりまし

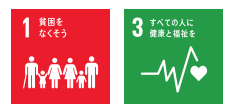
た(洲鎌さん)  
3年次には、3つのコースから選択した1コースに進み、同時に研究室にも所属する。2人は国際関係コースに進み、平和構築や紛争解決にかかわる研究をする篠田英朗教授

の研究室に入った。

「1年次の冬に、ケニアの孤児院と小学校でボランティア活動をしました。水くみのために学校を休む子どもにも『学校に来るように』と言えなかつた経験が、強烈に印象に残りました。そこで、まずは命を守る人道支援をしたいと考えました(目標1,3)」(山崎さん)

篠田研究室では、「目標16 平和と公正をすべての人に」への貢献を目指す研究を行っている。研究室の学びで大切にしているのは、問題解決能力の育成だ。国際機関への就職を希望する学生に加え、コンサルティング会社や商社へ就職する学生も多いため、汎用的なスキルを鍛えていく。JICAや大手コンサルティング会社などで用いられる問題解決の手法を学びながら、政策立案

この学びに関する  
他のSDGsの目標



\*1 地域社会研究コース、現代世界論コース、国際関係コース。

を実践する。

「商品を売るためのマーケティングから紛争問題まで、様々なテーマの問題分析に取り組みました。何度も取り組むことで、問題を構造的に分析するイメージを少しずつつかむことができました。JICAや国連の手法を学べたのも、政策立案を理解する上で貴重でした」(洲鎌さん)

### 留学経験を生かし、 平和構築のための研究を行う

同研究室には、3年後期から留学をする学生が多い。山崎さんは「トビタテ！留学JAPAN」(※2)に応募し、ウクライナの大学に留学した(写真1)。

「ホストファザーからは徴兵の経



写真1 山崎さんは、ウクライナの大学で約1年間、ロシア語の授業を履修。現地の学生や大使館職員、ジャーナリストと交流し、人脈をつくることができた。



写真2 コロンビアの先住民地区の住民にインタビューする洲鎌さん。国内避難民や元ゲリラ兵にも会い、コロンビアの現状への理解が深まった。

験を、大学の友人からは日常的に戦車が走っていた状況などを聞き、この国で紛争が起きていたことをリアルに感じました。また、大使館の方などからは、ウクライナの情報にはフェイクニュースが多いと聞きまし  
た。卒業論文では、正確な情報を収集し、ウクライナ東部の紛争解決への道筋を自分なりに考えていきたいです(目標16)(山崎さん)

洲鎌さんは、大学の交換留学制度を利用してコロンビアに留学し、同国の平和構築を学んだ(写真2)。

「コロンビア政府は2016年に左派ゲリラと和平合意を結びましたが、和平合意から離脱する勢力の出現や、政府による合意内容履行の停滞などの問題から、一部では激しい暴力が続いています。安定した平和

のために、加害者側の社会復帰に着目する重要性を強く感じるようになりました」(洲鎌さん)

洲鎌さんは、卒業論文では、テロリストのリハビリテーションをテーマに、暴力を容認しないよう、対象者の考え方を変容させる脱過激化の手法について考察した(目標16)。

「政治学などに加えて犯罪学や心理学の文献と研究室で学んだ問題解決手法を用い、テロリストの脱過激化のプロセスとその実現可能性を分析していきました」(洲鎌さん)

多様な地域・言語を選択した仲間が集まる研究室では、学び合いも盛んだ。コロナ禍で授業がオンラインになった際は、ゼミ生が声をかけ合い、自主ゼミを実施した。

「コロンビア以外の紛争解決の事例を知るとは、世界の問題を把握し、自分の研究を深める上でも有意義だと感じました」(洲鎌さん)

大学卒業後、2人はともに紛争解決学が盛んなイギリスの大学院への進学を希望している。

「将来的には国際機関に入り、ロシア語圏を中心に人道支援に携わりたいです」(山崎さん)

### 学びとSDGs

問いに対する解決策を適切に  
デザインする力を鍛える



東京外国語大学大学院  
総合国際学研究院  
教授  
篠田英朗  
しのだ・ひであき

私の研究室で最も力を入れているのは、問題解決能力の育成です。問いの設定から解決に至るまで、論理的に考えることを重視しています。

特に重要なのは、問いに対する解決策を、実現可能性や予算などを考慮し、適切にデザインすることです。この「適切さ」をつかむためには、自分が何に着眼して、どのような答えに導きたいのかといった視点を持つことが基本となります。例えば、紛争の解決策を考える際には、原因をピラミッド型の階層にし、その中の1つに焦点をあてて分析するという手法があります。そのように焦点を絞り、問いのレベルに合った解決策を考え出す手法を様々な学びます。

そして、学んだ理論や手法を用いて学生が主体的に学べるよう、3年次は、ワークショップ形式で様々なタイプの問題解決に取り組んだり、グループで関心のあるテーマに対して政策立案を行ったりして、机上の空論に終わらせないようにしています。

\* 2 グローバル化に対応する人材育成を強化するため、国が企業や団体と連携し、海外留学を支援する制度。